

盲目の音楽家と言えば、名曲『春の海』で有名な宮城道雄を思い出します。

8歳で失明し、『春の海』でフランス人女流ヴァイオリニスト、ルネ・シュメーと競演されて世界的な評価を受け、残念ながら、夜行列車から転落してなくなれた箏曲の音楽家です。

その宮城道雄のエッセイに<幸ありて><声を見る><騒音もまた愉し><音に生きる>から成る「音の世界に生きる」というのがあります。その中で、眼の見えない人にとって、「二つ目のハンディ」などと言える目明きでは思いもつかない不安、

「昨年の暮、一寸風邪をひいて欧氏管（おうしかん）を悪くした。普通の人ならたいして問題にすまいこのことが、九つの年に失明を宣言されたその時の悲しみにも増して、私の心を暗くした。もし耳がこのまま聞こえなくなったら、その時は自殺するよりほかはないと思った。音の世界にのみ生きて来た私が、いま耳を奪われたとしたら、どうして一日の生活にも耐え得られようかと思った。幸い何のこともなく全治したが、兎に角今の私には、耳のあることが一番嬉しくまた有難い。」

を述べています。

盲目の音楽家として、目が見えないハンディを克服してきたのに、音まで奪われるのか、不安でしょうがなかったのでしょうか。

更に、

「私は、眼で見る力を失ったかわりに、耳で聞くことが、殊更鋭敏になったのであろう。普通の人には聞こえぬような遠い音も、またかすかな音も聞きとることができる。そして、そこに複雑にして微妙な音の世界が展開されるので、光や色に触れぬ淋しさを十分に満足させることができる。そこに私の住む音の世界を見出して、安住しているのである。」と自分を戒め、更なる高みへと努力されています。

第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した辻井さん。マスコミは辻井さんの眼の見えないことに、必要以上に注目し、常人の「二つ目のハンディ」とまで言って、幼少の時の逸話を引き合いに出したりして「耳で吸収した音は熟成され、天から降ると称される響きで指先に躍り出る。」と天才だ天才だと絶賛しています。

全盲のハンディはあるとはいえ、まだ若く、挫折を知らない順風満帆な現在はまだ良いでしょうが、今後どのような障害に会うとも限りません。今後、長きに亘って活躍し、大成を期待される逸材です。どうか、鼻肩の引き倒しにならないよう、マスコミをはじめとする周りは、暖かく見守り、

「だが、しかし今日では、年も取ったせいであろうが、眼の見えぬことを苦しなくなった。時々自分が眼の悪いということを忘れてのことさえある。「ああ、そうそう、自分は眼が見えなかったんだな」と気がつくようなことがしばしばある。というのは、物事は慣

れてしまうと、案外不自由がないものだから、私なども家の中のことなら大抵、人の手を借りることなしにやれる。それだけにまた一しお、この耳とそして手の感触をありがたいものに思うのである。」

と思えるようになる年齢まで活躍できるよう、暖かく応援してほしいものです。

<春の海>

曲のモチーフは、宮城が8歳で失明する前に祖父母に育てられて目に焼きついた瀬戸内の福山市鞆の浦の海をイメージして描いたものである。

初演は、1929年末に作曲者である宮城と尺八演奏家の吉田晴風により日比谷公会堂で行われた。

宮城は、この演奏を聴いた批評家の牛山充に「君たちはまだ春にならぬこの暮の忙しいときに「春の海」なんて、そういうのんびりした気持ちになれるから倅せだ」と笑われたので、本当の初演は、翌年の春であると随筆『夢の姿』で述べている。

『春の海』が有名になったのは、フランスのヴァイオリニストのルネ・シュメーとともに演奏したレコードによってである。来日したシュメーが『春の海』を気に入り、尺八のパートをヴァイオリンで演奏したものを録音したこのレコードは、日本、アメリカ、フランスで発売された。

『春の海』は宮城が西欧の音楽に影響を受け作曲した作品で、伝統的な近世邦楽ではない。しかし日本的な気分を色濃く反映している。



[http://players.music-eclub.com/?action=player&sid\[\]=187294](http://players.music-eclub.com/?action=player&sid[]=187294)

<ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール>

冷戦時代にソ連のコンクールで優勝し、後に米国の文化使節として活躍したピアニスト、ヴァン・クライバーンの名を冠した国際コンクール。

62年の創設以来、おおむね4年おきに開かれてきた。優勝賞金は2万ドル。3年間のコンサートツアーやCD録音の権利も得られるなど、他のコンクールに比べて受賞後の支援が手厚いことで知られる。

日本人の優勝者は辻井さんが初めて。

<ヴァン・クライバーン (1934-) >

ピアニスト。アメリカ・ルイジアナ州生まれ。

ロジーナ・レヴィーンに師事した後、1958年、第1回チャイコフスキー国際コンクールで優勝。

冷戦下のソ連のイベントに赴き優勝したことにより、一躍国民的英雄となる。この優勝を祝してヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールが1962年より開催されている。

クライバーンの『チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番』（コンドラシン指揮 RCA 交響楽団）（1958年）は、ビルボードのポップアルバムチャートで1位（7週連続）を獲得した唯一のクラシック作品である（2007年現在）。

その後、フリッツ・ライナー指揮シカゴ交響楽団との共演で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」、ワルター・ヘンドル指揮シカゴ交響楽団との共演でプロコフィエフのピアノ協奏曲第3番なども録音。

1966年には初来日、日本での人気も高い。



第1回チャイコフスキー国際コンクールでフルスチョフソ連首相と



クライバーン70歳の演奏(2004年9月21日)モスクワ

日経：「全盲のピアニスト辻井さん優勝 米のコンクール」(6/8)

米テキサス州フォートワースで開かれた第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで7日（日本時間8日）、盲目の日本人ピアニスト、辻井伸行さん（20）が優勝した。19歳の中国人ピアニストと並んでの第1位だった。賞金は各2万ドル（約200万円）。1962年にスタートした同コンクールでの日本人の優勝は初めてで、これまで日本人最高位は69年の野島稔さんの第2位。障害を克服しての快挙に内外の注目を集めそうだ。

授賞式で名を呼ばれると、辻井さんは母親のいつ子さん（49）と共に壇上へ。受け取ったカップを胸に抱き締めて観客の拍手に応えた。新曲の演奏に関する特別賞も併せて受賞した。

辻井さんは東京都生まれ。生まれつきの全盲で、幼少期に音楽を始めた。現在、上野学園大（東京）に在学中。

先月31日、日本人としては40年ぶりに決勝（6人）に進出し、今月4日に始まった決勝の公開演奏では、ショパンのピアノ協奏曲第1番、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番などに挑み、観客から熱狂的に迎えられた。〔共同〕

<野島稔（1945-）>

ピアニスト。神奈川県横須賀市生まれ。桐朋学園大学卒。

1966年よりソ連邦の招きでモスクワ音楽院に留学、1969年、第3回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールに準優勝。

1981年と1985年にヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールの審査員。国内でも仙台国際音楽コンクールのピアノ部門で審査委員長を務めるほか、2006年には横須賀芸術劇場において野島稔ピアノコンクールを創設。

録音にあまり熱心ではなく、1988年「野島稔・プレイズ・リスト」、1999年「野島稔・プレイズ・ラヴェル」の計2枚のCD発表のみ。



天声人語：「二つ目のハンディ」(6/10)

円周率10万けた暗唱などの報に触れるたび、人間の底知れぬ能力に圧倒される。今回も驚くばかりだが、審査員には音の差がしっかり届いたらしい。米国の高名なピアノコンクールで優勝した辻井伸行さん(20)だ。

快拳は全盲の日本人が優勝と伝えられた。ニュース価値はそこにあっても、競演の結果に「全盲の」は要らない。それは奏者の重い個性だけれど、審査上は有利でも不利でもない。勝者が「たまたま」見えない人だったのだ。

録音を何度も聴いて曲を覚えるという。耳で吸収した音は熟成され、天から降ると称される響きで指先に躍り出る。「目が見えた場合」と比べるすべはないが、音色だけ見えているかのような集中は、不利を有利に転じる鍛錬をしのばせる。

師は「驚き以上の感動を伝えるため、彼は勉強を重ねてきた」と言う。全盲ゆえの贅辞は、実力を曇らす「二つ目のハンディ」だったかもしれない。体ではなく、音の個性が正當に評価された喜びは大きい。

20年前、ご両親は「生まれてよかったと思ってくれようか」と悩んだ。やがて、母が台所で口ずさむ歌をおもちゃの鍵盤で再現し、同じ曲でも演奏家を聴き分けてみせた。その才をいち早く見抜いたのは親の愛だ。

かつて息子は「一度だけ目が開くならお母さんの顔が見たい」と口にしたそう。母は今、「私に生まれてきてくれてありがとう」と涙する。「できない」ではなく、「できる」ことを見つめ続けたご褒美。世界が「生まれてよかった」と祝す才能は、どれもそうして開花する。

< 辻井伸行 (1988-) >

ピアニスト。東京都出身。

小眼球症により、出生時より全盲。

1995年全日本盲学生音楽コンクール器楽部門ピアノの部第1位。1999年全国PTNAピアノコンペティションD級で金賞を受賞。



1998年、三枝成彰スペシャルコンサートで大阪センチュリー交響楽団と共演しデビュー。

2000年サントリーホール小ホールで第1回ソロ・リサイタルを行ったのをはじめ、神戸音楽祭に出演するなど日本各地でコンサート活動を行っている。

編集手帳：「障害を乗り越えて道を歩む」(6/9)

1年ほど前、日本経済新聞の文化欄で、ある盲学校の先生が寄稿した一文を読んだ。生徒による短歌コンクールの話で、紹介されていた歌が忘れがたい。分からない色の黄色は分からない黄色い声は弾んでいるね。

作者は全盲の高校生という。こまやかな想像力と、みずみずしい表現力の結晶した一首である。音色に結晶させた人もいる。

世界的な演奏家を数多く輩出してきた「ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール」で東京都在住の大学生、辻井伸行さん(20)が優勝した。生まれたときから全盲のピアニストである。

普通は譜面を見て覚える曲を辻井さんは録音テープを聴いて学ぶという。見えない鍵盤をたたいては「天から降る」と評された独特の美しい音色に織っていく。天才や奇跡という安手の形容は寄せつけず、努力や鍛錬というありきたりの言葉では足りず、感嘆の吐息をもっとしか語るこのできない人生もある。

音楽に、文学に、その他の分野に、視覚障害を乗り越えて自分の道を歩む少年少女がたくさんいる。きのうは海の向こうから届いた朗報に、「黄色い声」を弾ませたことだろう。

<全国盲学生短歌コンクール>

岐阜盲学校高等部生徒会が主催、平成21年度で第53回を迎え、例年以下の要領で募集している。

目的は、短歌を通じて豊かな感性を育てることで、同じ境遇におかれた盲学生相互の心の交流を図るとしている。

選者は、歌誌「幻桃」主宰、岐阜県歌人クラブ運営委員の松村あや先生で、応募資格は全国各盲学校に在学する児童生徒、表彰として特選、入選、佳作及び優れた歌を多数出した学校に学校賞が設けられている。

第51回の特選は「テレビでは 靖国参拝 騒ぐ中 静かに眠る 一機のゼロ戦」西澤剛(八戸盲学校)。

<岐阜盲学校>

明治27年3月9日、眼病のために光を失った元岐阜中学校教員の森巻耳(もりけんじ)先生とイギリス人宣教師のA・F・チャペル氏は、盲人教育のために、岐阜市神田町1丁目に岐阜聖公会訓盲院を開設。

その後、明治42年に梅ヶ枝町に移転し、昭和15年には県立となり、9月、現在の北野町校舎に移転、現在に至る。



余禄：「豊かな音の世界」(6/9)

蚊の羽音ほどいらだつものはないと思うのは凡人で、「春の海」を作曲した箏曲家・宮城道雄は「二、三匹よって、プーンと立てる音は箏（ひちりき）のような音がしてなかなか捨て難いもの」と書いている。と同時に扇風機の音に聴き入ることもあったそうだ。

幼時に失明した宮城には音にまつわる随筆がいくつもある。「どこか広い海の沖の方に夕日が射（さ）して、波の音が聞こえるように思われる。……何となく淋（さみ）しいような、悲しいような気持ちになって」は扇風機の音を聞いての空想である。

日暮蝉（ひぐらし）の鳴き声はどこでも一つはド、一つはシの2通りともいう。「半音違いで、たくさん時雨（しぐ）れて鳴いているのは何ともいえぬよいもので、不思議な世界に引き込まれる」。世界の豊かさは音で祝福される（「新編・春の海」岩波文庫）

今思えば母の口ずさんだジングルベルが一つの小さな世界を開いたことになる。ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した20歳の辻井伸行さんが、母の口ずさむ旋律をおもちゃのピアノで奏でたのは2歳のクリスマスの夜だった。

「朝ごはんの時の川の音がきれいだった」「木の葉の音が東京と違った」 - - 生まれつき全盲の辻井さんは小さいころから家族によくそんな話をした。どんな複雑な曲も耳で聞いてすべての音を記憶できるその頭の中では、水の音や鳥の声を聴くと自然に音楽が浮かぶのだともいう。

「僕は風が大好きで、風が吹いてくるといつも立ち止まって今日の風はどういう風かと想像します」。かつての辻井さんの言葉だ。その生きる世界の豊かさは、これからどんな音楽となって私たちに感動をもたらしてくれるだろう。

< 宮城道雄 (1894-1956) >

作曲家・箏曲家。兵庫県神戸市生まれ。旧姓は菅（すが）。

『雨の念仏』（1935年）などの随筆により文筆家としての評価も高い。作家の内田百閒とは親友同士で交友も深い。

8歳で失明し、生田流箏曲の二代菊仲検校に師事、その後二代中島検校に師事して11歳で免許皆伝となる。

1919年、本郷春木町の中央会堂で念願の第1回作品発表会を開催して作曲家としてデビュー。古典楽器の改良や新楽器の開発を行い、十七絃、八十絃、短琴、大胡弓などを発明。1929年に発表した名曲「春の海」では、フランス人女流ヴァイオリニスト、ルネ・シュメーと競演され、世界的な評価を得る。

代表作に『春の海（箏と尺八）』『瀬音（箏と十七絃）』『数え唄変奏曲』『ロンドンの夜の雨』『さくら変奏曲（箏2面と十七弦）』など。

